地域を支える 農業人 WAZABITO

PROFILE

山田（やまだ）　博嗣（ひろつぐ）さん（55歳）

弥富市

あいち米、反撃のひとつぶ

山田さんは就農して30年になる水稲オペレーターです。弥富地域農業機械銀行に所属し、現在は株式会社山田ライスファクトリーの代表として、30ヘクタールの面積で米や麦、大豆を栽培しています。

土づくりに牛ふん堆肥を毎年投入するなど、化学肥料や農薬の使用を極力抑えた、環境に優しい農業を目指す山田さん。また、きめ細やかな栽培管理も心がけており、水田を巡回して作物の生育を確認することを怠りません。「外から眺めるだけでなく、実際に田んぼの中に入って、一つひとつの顔色を見ることでしか気づけない小さな変化を見逃さないようにしたい」と話します。

主に鍋田地区を耕作している山田さんはこれまで、作物の性格に合わせるために田んぼごとの地質の違いを見極めながら丁寧に肥料設計や土づくりを行ってきました。そんな苦労があるからこそ、年々農地が減少している地域の現状について、「お預かりしてきた土地とは言え、30年かけて育ててきた豊かな水田が1年足らずで埋め立てられて、物流倉庫に変わっていく姿を眺めるのは複雑な気持ちですが、時代の流れだと思っています」と心境を語ります。

そのような中、山田さんは「近年の異常気象による大雨に対して、保水などの多面的機能を持つ水田が減ってしまうと、洪水の発生リスクが高まってしまうため、地域の暮らしを守るためにも、農地面積の維持に尽力したいと考えています。一人でも多くの方に農業への関心を持っていただいたり、農地の価値を知っていただく働きかけを行い、地域一丸となって地域課題の解決に取り組んでいくとともに、お預かりしている農地をしっかりと維持・管理していきたいです」と未来を見据えます。

今後の農業経営については、「温暖化の影響によりカメムシやジャンボタニシが地域で大量発生することで引き起こされる食害や、トビイロウンカにより稲が数十株から数百株まとまって倒伏する「坪枯れ」等への対応が不可欠です。また、外来種である帰化アサガオの種子も、農地に侵入すると除草剤が効かないために米の収穫量に大きく影響を及ぼすことから、行政や地域の方々と一体となって対策していくことが必要だと考えています」と課題を語ります。

そんな山田さんは、今年から愛知県の新ブランド米として発売された"愛ひとつぶ"の生産について、JAからの栽培依頼を快く引き受けてくださいました。その理由について伺うと、「30年米づくりをしてきましたが、同じ栽培条件が揃った年は一度もありませんでした。自然が相手の農業では、毎年同じ作業工程を繰り返していては変化に対応できず、後退してしまいます。そのような点から、農業を続けていくということは、日々新しいことへ挑戦し続けることだと考えています。だからこそ、新ブランド米の生産も、新たなチャレンジだと思って喜んで引き受けました。育成や試験ほ場に関わった全ての方々に感謝し、今後も栽培に取り組んでいきたいです」と笑顔で答えてくださいました。

今後の目標については、「産地全体で農業を盛り上げていくこと」と話す山田さん。最後に消費者の方に向けて、「米の消費量は年々落ち込んでいますが、"愛ひとつぶ"をはじめとして、魅力の詰まった愛知県のお米を、ひとつぶが万倍となり、一人でも多くの方に食べていただきたいです」とメッセージをいただきました。

愛ひとつぶ

今年から愛知県のブランド米として新発売されました。甘さ、弾力ともにあいち米の最高峰を目指し、生産方法から成分に至るまでお米のすべてを見直すことで辿り着いた品種です。

愛ひとつぶは、登録した生産者のみによって一粒ひとつぶ丁寧に栽培されています。